

ストーリー（もの語り）が持つ意味： 平和ワークにおいてファシリテーションが何をなしうるか

奥 本 京 子

The Meanings of Story-telling: What Facilitation Enables Us to Do in Peacework

Kyoko Okumoto

抄 録

平和ワークにおける芸術アプローチ、そしてファシリテーション・メディエーションの交差点について、実践例を基に意味づけする。第一に、人と人が家庭・社会・国家・国際社会等という多様な環境の中で生きていくために必要なコミュニケーションの多様性の中で、平和創造・平和構築・紛争転換の領域から語られる「ファシリテーション・メディエーション」がどういった立ち位置にあるのかを明らかにし、第二に、芸術アプローチの一つの要素としての「もの語り（ものを語ること）」を取り上げ、「もの語り」が如何なるファシリテーションによって可能となるか、特にサークルプロセスの手法を通じて、それが如何に平和ワークを可能にするかを検証する。

キーワード：平和ワーク、ファシリテーション、メディエーション、もの語り（もの語る
こと）、サークルプロセス

(2018年9月25日受理)

Abstract

The article examines the relationship between the arts-based approaches in peacework (peacebuilding work) and facilitation/mediation using the examples of experimental practices. First, where facilitation and mediation are located in the area of peace creation, peacebuilding and conflict transformation is described as methods of communication that are necessary in the diverse levels of society/world. Second, how facilitation enables story-telling as an arts approach is explained by using the method of circle process that makes peacework possible.

Keywords: peacework, facilitation, mediation, story-telling, circle process

(Received September 25, 2018)

1. はじめに

本報告では、筆者が実践・研究する分野である平和ワークにおける芸術アプローチにおいて、ファシリテーション・メディエーションとストーリーテリングがどう交差しているかについて、実践例を基に意味づけをしたい。第一に、人と人が家庭・社会・国家・国際社会等という多様な環境の中で生きていくために必要なコミュニケーションの多様性の中で、平和創造・平和構築・紛争転換の領域から語られる「ファシリテーション・メディエーション」がどういった立ち位置にあるのかを明らかにしたい。第二に、ストーリーテリング、すなわち「もの語り（ものを語ること）」を取り上げる。そして、「もの語り」が如何なるファシリテーションによって可能となるか、サークルプロセスという手法を通じて、それが如何に平和ワークを可能にするかを検証する。本研究は、ファシリテーション・メディエーションとは何かを検証し、平和創造のワークを容易（facile）にするアプローチとしてのもの語りのあり方を模索するものである。こうして、芸術アプローチの一つの方途が、関係性創りのもう一つの新しいチャンネルを引き出すこととなり、当分野の研究・実践への貢献の可能性の模索となると考える。

2. ファシリテーション・メディエーションとは何か

ファシリテーション・メディエーションは、様々な場面において用いられるプロセス推進のための方法・道具である。ここで「プロセス」とは、人と人との間において（ときとして人と自然においても）関係性を進化・深化させる過程そのものを指す。ファシリテーション・メディエーションは、教育や学びの現場において用いられることが多いが、近年は企業や市民社会、NGOの組織運営等においても活用されている。平和創造・平和構築・紛争転換といった平和ワークの現場、またトレーニングの場においても、ファシリテーション・メディエーションは欠かすことのできない方法である。第一に、これらの方法には何が必要か、目的は何かなどについて検証し、平和ワークにおける位置付けを試みる。

2. 1. コミュニケーションの種類

まず、コミュニケーションという大きな概念の中に、ファシリテーション・メディエーションがどのように位置付けられるかを考察する。演劇人であり公共政策等について社会的な提言を続ける平田オリザによる表「話し言葉の地図」によれば、「話し言葉」すなわちコミュニケーションは、いくつかに分類される。「演説」は政治家などに代表される主体によってなされるコミュニケーションであり、「談話／スピーチ」は文化人などが行う、「説得・対論／ディベート」は弁護士などによる、また、「教授・指導／ティーチング」は教師によるコミュニケーションである。そのほか、「対話／ダイアログ」、「挨拶／グリーティング」などがあり、家族による「会話／カンバーセッション」、また、「反応・叫び／リフレクション」、「独り言／モノログ」などがある（平田, 2001: 9）。この表に「促進／

ファシリテーション」や「調停／メディエーション」、または平和ワークにおいて同様に重要な「交渉／ネゴシエーション」は掲載されていない。

平和紛争学、平和構築学、紛争転換学などの平和ワーク領域に焦点を当ててコミュニケーションの類型を展開するとすれば、「交渉・駆け引き／ネゴシエーション」は外交官や NGO 職員などの主体によってなされる重要なあり方である。また、「促進・抽出／ファシリテーション」や「調停・仲介／メディエーション」も加わるべきだと考える。

コミュニケーションの一つのあり方としてのファシリテーション・メディエーションにおいては、これまたコミュニケーションのあり方としての「対話」の要素が必要であり、オルタナティブな発想法が結実させる「転換・超越」といった要素が目的となる。次に、これらの要素について検討していく。

2. 2. 「討論」と「対話」の対比

Lisa Schirch と David Campt による対照表を参照すれば、「討論／ディベート」と「対話／ダイアログ」の対比は興味深い（Schirch and Campt, 2007: 9）¹。

そこでは、「討論」は：

1. 目標は、「勝つ」ことであり、自身の見方を肯定して、相手のそれを否定的に捉える。
2. 相手の弱点を探そうとして話を聞く。
3. 相手の経験を、ゆがめられた、あるいは不正なものとして非難する。
4. その問題に関する自身の見解を変えるつもりはないと決め込む。
5. 相手の立場や動機についての憶測に基づいて話す。
6. 互いに反対し合い、相互に相手が間違っていることを証明しようとする。
7. 怒りのような強い感情は、相手側を威嚇するのに使用される。

それに対し、「対話」は：

1. 目標は、違った視点を理解し、相手の見方について学ぶことである。
2. 相手の経験がその心情をどのように形作っているのかを理解するために聞く。
3. 相手の経験が本当であり正当なものとして受け入れる。
4. その問題に関する自身の理解を広げることに、一定オープンである。
5. 何よりもまず、自身の理解や経験に基づいて話す。
6. 共通の理解に向かって協働でワークする。
7. 怒りや悲しみのような強い感情は、それらが経験や信条の強さを含んでいる場合には、その場において適切である。

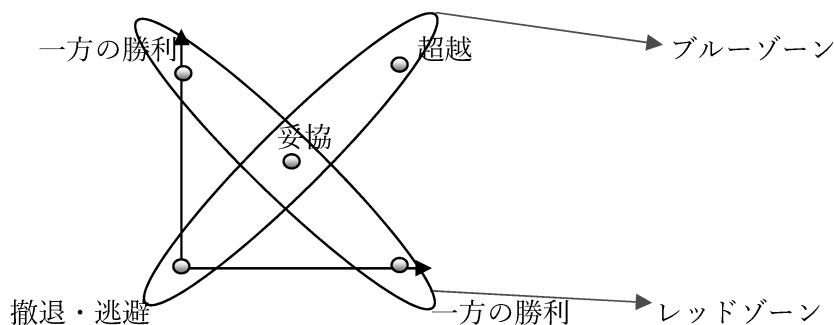
さらに言えば、「対話／ダイアログ」では、相手からのフィードバック、特に肯定的で建設的なフィードバックが期待できる。そこでは、腹を割った他者との深い関わりが必要になる。対話は、知らない人どうしの情報交換において、また、知り合いどうしの異なる

価値観・感受性の、摩擦を生じる可能性を秘めた出会いである。それに対して、「討論／ディベート」とは、相手を説き伏せ打ち負かすことが一番重要であり、自身の正当性・正義・強さに揺るぎはなく、人と人との関係性において勝利することに価値を置いている。次項のトランセンド理論においても明らかになるように、平和ワークでは、勝敗の発想から脱し、転換・超越の発想へとシフトすることが重要である。ファシリテーション・メディエーションといった方法は、そのような発想の転換をわれわれに求めるのである。

また、対話とは、人と人との関係性の構築のプロセスそれ自体を重視する。加えて、プロセスを重視することから、その結果である成果にも敬意を払う。上述の通り、関係性のプロセスの推進とは、まさにファシリテーション・メディエーションの第一の目的であって、対話は、それらの方法の中心的で必須の要素として機能するのである。

2. 3. トランセンド理論における必須のコミュニケーション

コンフリクト（葛藤・摩擦・対立・紛争等）を平和的手段によって解決・転換・変容させることを平和ワークの中心に捉えようとするトランセンド理論によれば、二元軸の紛争解決図のうち、「一方が勝利」する場合の手段としては「討論」が、「超越／トランセンド地点」に達成するための手段としては「対話」が望ましいとされる。加えて、「撤退」のための手段としては、「独り言／モノログ」を掲げて良いかもしれない。「妥協」については、「交渉／ネゴシエーション」が必要である。



図：トランセンド理論による紛争解決の5つの基本的な結果
(ガルトゥング, 2000: 25)²

「一方が勝利」する場合、「一方」は言うまでもなくその目標を勝利することとしなければならない。すなわち、相手を敗者に陥れるためには、討論的要素を駆使する。自身の見方を肯定して揺るがず、相手のそれを否定的に見たり、憶測に基づいて非難したりする。そして、「レッドゾーン」的発想における「妥協」はコンフリクト当事者双方・全員を平等に扱わない³。目標の達成レベルが10対0、9対1、…の延長線上にある5対5としての妥協の位置付けである。このような不平等的発想では、平和ワークは実現しない。

レッドゾーンを脱し、「ブルーゾーン」的発想を目指すとき、実は、「撤退」も重要な一

つの選択肢である。例えば、コンフリクトが熟して行く場を無くしたように見える場合、当事者は双方・全員が、それぞれに「独り言／モノローグ」すなわち自己内対話を行うのである。それによって、ヒートアップした状況からクールダウンするための何らかの方途を模索するために、いったんは、コンフリクトから撤退・逃避するのである（ただし、その間、様々な方法によって状況を打開するための方策を練る努力を怠るものではない）。

ブルーゾーンにおける「妥協」は、レッドゾーンのそれとは、質を異にする。ここでは、「交渉／ネゴシエーション」が必要であり、丁寧な双方向に機能する関係性の構築が求められる。目標の達成レベルが1対1、2対2、3対3、…の延長線上にある「妥協」であり、原則的に当事者は平等に扱い、扱われるのである。1対1から5対5、さらには8対8、9対9、…とレベルが上がるに従い、徐々に「超越点」に近い点を志向していく。

こうして、右肩上がりにシフトしながら、ブルーゾーンにおけるコンフリクト転換のプロセスにおいて、双方向的コミュニケーションの要素のほとんどない「独白」から、「相互への行為／インターアクション」の要素が存在する「交渉・駆け引き」や、さらに双方向性が深化した「対話」へと、そのベクトルの各段階に平和ワークの意味が生まれるのである。こうして、ファシリテーション・メディエーションといった方法・道具を活用し、平和ワークを実践するため、平和ワーカーはその作業プロセスにおいて、対話を実現させながら、コンフリクトの転換・超越といった結果を生み出していく⁴。

2. 4. 平和ワークにおけるファシリテーション・メディエーションの位置付け

トランセンド理論における「ブルーゾーン」、すなわち「撤退」から始まる「妥協」や「転換・超越」の領域では、自己内対話としての独白、そして交渉、さらに対話といったプロセスが必要であることが分かった。またその目的は、究極的にはコンフリクト転換であることが検証された。日常に生活する中で（マイクロレベル）、社会生活において（メゾレベル）、国家・国際関係において（マクロレベル）、それより大きな概念等の中で生きていく中で（メガレベル）、われわれは様々なコンフリクトに出会う。これは不可避なことであり、関係各人・当事者の間に何らかの目標の不一致がある場合、自然な現象である（奥本、2012: 27）。また、コンフリクトとまでは認識しにくい場合においても、関係各人之間にある様々な感情や意見を抽出したりして、関係性を深化・進化させることが可能なことがある。人・自然との関係性は未知数であるのが、われわれが生きるこの世界である。

レッドゾーンの勝ち負け価値に支配されずに、ブルーゾーンの発想で豊かに平和的に関係性を構築することは如何に可能か。その方法を、平和ワークの中に模索し位置付けてみたい。接触する人々がコミュニケーションを成立させるとき、その一助となるのが、非当事者・外部者（outside party、外部の当事者）による「促進／ファシリテーション」や「調停／メディエーション」であるとは考えられないだろうか。それは、非当事者による当事者間の対話を促進する、すなわち、容易（facile）にするという重要な役割を持つ。

ファシリテーションとメディエーションは重なり合う部分が多い。本稿では、メディエーションの概念は、ファシリテーションの概念の中に含まれるとしておく⁵。ファシリ

テーションとは、コンフリクト当事者を含む様々な関係者（ワークショップの参加者やコミュニティのメンバー同士など）のコミュニケーションを円滑に進め、関係性を深化するために、外部者が当事者の関係性に関与・介入しながら、やり取りを促進するということを指す。また、当然のことながら、その関係性にコンフリクトが潜在している場合もあれば、既に顕在化している場合もあり得る。ファシリテーションには様々な形があり、それが用いられる文脈に応じて、ファシリテーターは工夫を凝らす。

メデイエーションとは、原則として、コンフリクトの当事者のコミュニケーションに限り、外部者である調停者・メデイエーターが、当事者の思いを聞き取ったり、当事者が思いを表現するのを手伝ったりするように、関与・介入しながらコンフリクト解決のためのコミュニケーションを調停するということを指す。例えば、平和ワークの重要な一領域である修復的正義（restorative justice, RJ）の現場においては、外部者によるメデイエーションを通じて、被害者と加害者といった当事者間の対話を可能にしていく。そこでは特に、被害者のニーズ（必要）に焦点が当てられる。また加害者においても、より大きな見地からの「被害」の要素が見て取れることが多く、加害者のニーズをも丁寧にも扱う。加えて、双方の当事者を取り巻くコミュニティ自体のニーズにも注目し、それらのすべてのニーズが満足できるように、対話のプロセスが進行する。メデイエーションは、上記のファシリテーションにおいて、コンフリクトに特化した文脈に対応する介入コミュニケーションのあり方といってもいいであろう。

これらの被害者を始めとする人々の「声」を聞くためには、何らかの工夫が必要になる。また、傷つき-コンフリクトが顕在化して起こる一つの結果-が無い文脈においても、人々が接触し、関係を持ち、その在り方を平和的に発展させるためには、ファシリテーション・メデイエーションを活用し、関係者・当事者の「声」を引き出すことが可能であるし、意味がある。本稿後半においては、その工夫の一つについて検討していきたい。

3. 「もの語り」の実践：サークルプロセスを手段として

もの語り・ストーリーの持つ力を活用する平和ワークの実践がある。平和ワークにおける芸術アプローチの方法論は多様であるが、本稿ではもの語りを軸に、如何に平和創造・平和構築・紛争転換の作業が可能となるかを検討していく。平和ワークの現場においても、またトレーニングの場においても、ファシリテーション・メデイエーションは欠かすことのできない方法であると前半で議論した。では、そういった場面において、もの語りを実体化するためのサークルプロセスを用いた実践例を紹介しつつ、それらが如何に機能するのかを理解したい。

3. 1. もの語り／ストーリーテリングとは何か

そもそも“story-telling”とは、文字通り「ストーリー（話、はなし）を語る・伝えること」である。そして、それを行う主体は、“story-teller”すなわち「ストーリーテラー、話

の語り手」である。自らストーリーテラーであり演劇人である John O'Neal は、次のように定義する：“Liers cover things, but story-tellers uncover things, and everyone can take good out of it. (嘘つきはものごとを隠そうとするが、ストーリーテラーはものごとを開示する。そしてみんながそこから善きことを得る)” (Cohen and Lund, 2011) ⁶。

“Story” の定訳は、「物語」であろう。そこには、「出来上がった作品」という、ある種の結果としての創造物といったニュアンスが付いて回る。しかし、本稿の意図としては、この言い古された言葉を用いることを取って避けることで、結果としての物語に軸を置くのではなく、プロセスとしての “story” そして “story-telling” に重心を置きたいと考える。ここでは、受け取り手である聴衆者やワークショップの参加者に、創られゆくプロセスを味わいながら、考え、感じ取って欲しいとの意図を反映させるべく、「もの」+「語る」（動詞）、「もの」+「語り」（名詞）といった文言を使用することにする。

Kay Pranis によれば、もの語り・もの語ることの重要性とは、次の通りである：もの語りとは、聴く人を開くやり方で情報を提供する。情報が認識的に明示・提示される時、われわれは聞く内容を自動的に審査して、それについて賛成か反対かを決めようとするものだ。まず知的に関与し、それに対しどう応答するかについて考え始めることが多いのである。しかし、もの語りは、違った形の聴き方を必要とする。身体は弛緩し、椅子の背にもたれかかり、より開いており、不安感をあまり持たない。内容についての先入観無しに、もの語りを受け入れる。知的に加えて、感情的にも関与するのである。こういった聴き方は、われわれが情報をもっと徹底的に交換することを可能とし、人々がより深い理解を持つことに繋がるのである (Pranis, 2005: 39-40) ⁷。

この意味において、もの語り・もの語ることを実体化するための「サークルプロセス」という方法を次に紹介する。

3. 2. もの語りのサークルプロセスによる共有

もの語りをサークルの中で共有することにより、対話や転換を経験していく方法論がある。この「サークルプロセス」は、北米やニュージーランド等の先住民族の古来の知恵に加えて、現代の人々のニーズへの敬意・尊重のシステムとして発展してきた。先述の Pranis によれば、サークルプロセスとは、下記の通りである (Pranis, 2005: 6-7) ⁸。

- ・すべての参加者の存在と尊厳に栄誉を与える
- ・すべての参加者の貢献に価値を見出す
- ・すべてのものごとの連続性を強調する
- ・感情的で霊的な表現を支援する
- ・すべてに対して平等に声を与える

サークルプロセスの実践においては、その参加者は、基本的には一重の円になり内側を向いて座る。サークル・キーパーと呼ばれるファシリテーターが全体のプロセスをファシリテートする。トーキングピースと呼ばれる象徴的なものが一つ用意されていて、そのピースを持った人は声を出すことができ、持たない人たちはその声に耳を傾けるのである。す

べてのあり方を受容されたという安心感のもと、人々は、声を発し合い、衡平に語り合うのである。

このサークルプロセスは、平和ワーク分野の中でも、特に修復的正義の分野で多用される。われわれの近現代社会においては、加被害に関わる多様な人々の声を聞き取ろうとするシステム－制度・装置－は存在しなかったといえよう。応報的正義 (retributive justice) の発想から、専ら、加害者の懲罰の重要性が強調されてきたのである。そこでは、加害者が如何に悪事を行ったかが検証され、罰を与えられる。被害者の存在については、ほとんど顧みられず、ましてや、加害者・被害者の暮らすコミュニティにおける傷つきは、全く注目されない。加えて、加害者が如何にして加害者になったか、加害者の中の暴力の連鎖・連続性に起因する被害性といったものも顧みられない。

修復的正義 (RJ) の場合、上記のような回顧されずにきた諸要素を見直し、多様な当事者の多様な声を聴き取るために頻繁に用いられるのは、サークルプロセスである。しかし、このプロセスを用いることで、すべてが解決するわけではない。謝罪や和解が保証されているわけでもなく、万能薬というわけではない。RJの開拓者の一人、Howard Zehrによれば、RJとは下記のようなものである (Zehr, 2002: 8-13)⁹。

- ・一義的に、赦しや和解のためのものではない
- ・メディエーションではない (物理的な出会いに限定されるわけではなく、「会議」や「対話」という言葉に置き換えられることがある)
- ・一義的に、常習的犯行や繰り返される犯罪を軽減するために設計されたわけではない
- ・ある特定のプログラムでも青写真でもない
- ・一義的に、比較的軽少な加害や初犯者のためのものというわけではない
- ・新しい、あるいは北米で開発されたものでもない
- ・万能薬でも、必ずしも法的制度に代わるものでもない
- ・必ずしも、禁固・監禁に代わるものではない
- ・必ずしも、応報・懲罰の反対概念というわけではない

この「…ない」リストは、一般的傾向としてRJが一方向的に期待・誤解される事柄に対するアンチテーゼとして作成されたのであろう。RJとは、それ自体がすべてに取って代わる魔法のような発想というわけではなく、実直に、人々のニーズ (必要) やロール (役割) を重視するという発想に依っている (Zehr, 2002: 13)。

先述のPranisによれば、サークルとはもの語りのプロセスである。歴史のもの語りや一人ひとりの経験を用いることで、関与するすべての人々が、サークルの中で、自身が置かれた状況を理解し、どのように進んで行けばいいかを模索することができるという。それは、一方向的なレクチャーやアドバイスされることに依るものではなく、苦勞・痛み・喜び・絶望・達成感といった感情のもの語りを共有することによって実践される。個人的なもの語りは、サークルの中で洞察や智恵の源泉となる。もの語るということは、自己内思考・対話のプロセスである。そこでは、どのような出来事が自身に起こったのか、なぜどのように自身に衝撃を与えたのか、自身や他者をどう理解するのかを、明確に表現することに

なる（Pranis, 2005: 39-40）¹⁰。

3. 3. サークルプロセスを用いたもの語りの実践例

次に、サークルプロセスの手法を用いて、ワークショップの参加者がもの語るにより、何が起こる可能性があるかを、実践例を基に紹介し、もの語りの機能について検証したい。サークルプロセスでは、通常、サークルの中で話し合ったことは外に持ち出さない。参加者は相互にそのことを確認し、プロセスは原則としてサークルの中で完結する。話し合いのトピックが明確に設定されている場合もあれば、それが柔軟に変容する場合もある。目的は、深く親密なコミュニケーションによる相互理解・共感・信頼の構築等であることが多く、結果として紛争解決や和解に至ることもある。ここでは、サークルプロセスによって、もの語りというものの持つ力や意味について考え、どのようにそれらを引き出すファシリテーションの可能性があるのかを検討する。特に、パーソナルなストーリー（個人のもの語り）の共有によって、人と人との関係性が発展し、加えて、コミュニティそれ自体における平和ワークの目的－平和構築・紛争転換・和解・共生といった－が果たされる可能性について模索したい。

本稿では、もの語ることを可能にするためのサークルプロセスに基づくファシリテーションの例として、筆者が2011年から毎年続けてきた平和構築トレーニングのプログラムからの実践を取り上げる。東北アジア地域平和構築インスティテュート（Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute, NARPI, 日本語発音ではナルピと読む）では、2010年のパイロットプログラムを経て、2011年から毎年夏季に2週間ほどのプログラムを提供してきた。トレーニングの構成は、1コースにつき5日間、ほぼ毎日午前9時から午後5時半頃まで行われる。ファシリテーターは2人のチームによって構成されており、参加者十数名と、合計約31時間のときを共に過ごす。同時進行で3コースが展開し、プログラム全体の参加者総数は数十名になる¹¹。

筆者は、ナルピの夏季トレーニングが本格的に開始された2011年から、ファシリテーターとして、また運営委員（2013年からは運営委員長）として、毎年中心的な役割を担ってきた。ファシリテーターとしては、毎年、1ないしは2コースのファシリテーション－例えば、Historical and Cultural Stories of Peace, Nonviolent Communication and Facilitation, Arts and Stories for Peacebuilding: Presenting Our Histories Justly, Conflict and Peace Framework, Applied Theatre in Peacebuilding, Nonviolent Struggle for Social Change, Arts, Media, and Peacebuilding など－を担当してきた¹²。

ナルピの5日間のトレーニングにおいては、コースによっては、また参加者のニーズによっては、いくつかの条件が満たされた場合には、サークルプロセスを用いてアジア・太平洋の（特に東北アジアに焦点を当てて）歴史的・政治的コンフリクトを扱うことがある。その場合、いくつかの条件とは、例えば、次のようであろうか。1. 5日間のトレーニングのうち、徐々に安心感が一定程度形成された4日目あるいは5日目に、2. テーマに対する参加者の関心・コミットメントのレベルが高く、3. サークルになって共有される語りを

サークルの外に持ち出さないこと（守秘義務）を約束することができる、とファシリテーター2人が判断した場合である。そうして、グループとして、思い切って実験的に語り合い、各人がもの語りをを行うのである。

ナルピにおいて、筆者が共同ファシリテーターと一緒にを行うサークルプロセスの工夫は次の各要素を紡ぎ合わせたものであることが多い。第一に、サークルプロセスの中の「サモアン・サークル」は、二重のサークルになって参加者がもの語るシステムである¹³。最初は、外側の輪・サークルに全員が座り、ファシリテーターのプロセスへの導入を経て、内側のサークルに用意された4～5脚ほどの椅子に、トピックに関して対話したい人が移動、そこに座る。原則的には、内側に座った人たちが語り合うのだが、ナルピでの実践では、トーキングピースを用いることが多く、内側のサークルの中でトーキングピースを持った人だけが、順番に話すことができる。当該のトピックについて、ある一定語り終えたと感じた参加者は、内側の席を立ち、外側の席に戻る。空席には、次に語りたい人が外側から移動して座る。トピック自体は緩やかに変容していく。こうして、参加者がある一定均等に声を出す機会を分かち合うことができる。互いに尊重し合いながら、多様な意見や感情を共有することが許される場を、グループ全体が創り出していくことができる。外側のサークルに座る人々が、その安心感・安定感を下支えしているということもできるかもしれない。

第二の要素である「ホーポポノ」は、ポリネシアの「正しく戻す」という意味を持つ言葉である。ハワイ文化では、何世紀もの間、家族・共同体・環境との関係における身体・感情・魂の充足についての豊かな知識体系が、脈々と受け継がれてきたという。ホーポポノとは、具体的な和解の方法の一つであり、大家族における調和のとれた関係性を維持し、破壊された場合には修復し、紛争を解決するためのシステムである。1960～70年代からのハワイアン・ルネッサンスの波の中で再興され、欧米的な要素も盛り込まれるようになり、近年においてはハワイの多文化社会の社会福祉分野において導入されてきた(Shook, 1985)¹⁴。Johan Galtung は、このメソッドを、紛争の転換や和解への手引きを意味する言葉として借用し、次のように理論化した。1. 事実を照合する。それぞれの立場から見てコミュニティに何が起こったのか。2. なぜ起こったのか探求する。「主体のある行為」を注視する。3. 責任を分かち合う。「主体なき行為」をも謝罪する。4. 1～3に基盤を置いた、建設的な、将来を見据えたプログラムを考案する。5. 紛争が終結したことを宣言する。象徴的に、記録を燃焼させる(ガルトゥング, 2005: 3)。ナルピにおいては、もの語りのプロセスの大枠において、このメソッドを導入することがある。

また、これらの上記のメソッドに加え、ロールプレイ的要素を導入することが多い。自身を東北アジアにおける歴史的・政治的コンフリクトの直接的な当事者だと自己認識していないトレーニングの参加者それぞれが、東北アジアの歴史的人物－有名な人物に限らない－のロールを被り、その人になりきったつもりで役割を演じるのである。今まで想像すらできなかった、また想像しようとすらしなかったロールに入り込むとき、参加者はその人物の頭と心と身体－もちろん仮想ではあるが－の中側から、世界観を構築する。それは、

参加者にとって斬新だったり、参加者自身が今まで保持していた視野とは正反対の世界であったりもする。

上記のこれらの複数の要素を、総合的・創造的に組み合わせ、もの語ることを容易 (facile) にする。このとき、参加者の創造性・想像力によって、空間軸・時間軸を自由に超えることが可能となり、人々の可能性の探求の力と信頼に基づいた建設的な関係性の中で、ようやく本当に語るという深い対話の芽が生まれる。深い理解と共感の力が、一人ひとりの参加者をして、今ここで考え感じたことを率直に表現させるのである。平和ワークの一つのあり方がこうして展開していく。そうして、語り手や聴き手が一緒になって平和ワーカーへと変容していくプロセスが開始する。

4. 芸術アプローチの一つの方法論：個人のもの語りの共有からコミュニティの創造へ

サークルプロセスを用いて、もの語りの手法を十分に活かすために、自由で豊かなファシリテーション・メディエーションは、ある種の芸術／アートとして位置付けられるのではないか。芸術をめぐり、われわれは何を行うのだろうか：

1. 芸術家は、表現したいと思うものを様々な方法で表現する。
2. 鑑賞者は、それぞれの思いを胸に鑑賞する。
3. 芸術をめぐり、鑑賞する人々の間に関係性が生まれることがある。
4. 芸術を創作する側と鑑賞する側の間にも関係性が生まれる。
5. 鑑賞者自身も、心の中に無形表現するなど自己内対話を行うだろう。(奥本, 2012: 69)

これを、「芸術家」を「語り手」に、「鑑賞者」を「聴き手」に置き換えると、サークルプロセスで起こる現象の説明にもなるであろう。語り手の語る行為によって、聴き手の関心はその内容に集中する。もの語り共有されることによって、グループとして、その内容に深く共感するのである。芸術家・語り手、鑑賞者・聴き手が、一緒になったそのグループは、コミュニティとしての一体感を得ることも前述した通りである。

ここで、「市民芸術家、citizen artists」の重要性について触れておきたい¹⁵。芸術家とは如何なる人々であるのか、芸術とはどうあるべきか。歴史家である Howard Zinn は、国家の暴力行為に抗して行動する多数の芸術家の姿を描き、芸術家の再定義を試みている¹⁶。芸術家とは、既成の枠組みや「常識」に囚われず超越し、自由に発言・行動する。そして、それこそが芸術家の本質であり、市民の本来のありようであるとする。すなわち、とりわけ生命に関わる暴力に直面するとき、権力や主流メディアに抗して芸術家が取る批判的行動は、市民としての芸術家が自らそのような行動を促していると考えられる。芸術とは、属性の如何に関わらず、剥きだしの個人個人が、真摯に、そして誠実な態度で社会に向き合うような、平和を創出する力を人々から導き出す。特に、人命に関わる事柄については、既成の枠組みから超越し、自由に思考・行動しなければならず、そういう市民一人ひとりが芸術家という存在であるべきと主張する。ここで、「市民」と「芸術家」は同義語となり

一体化していると考えられる。

本稿では、「市民」とは、一個の民であり、社会を構成する個々人であるとしておく。市民が芸術家となり、芸術家が市民となり、そうした市民芸術家が平和ワークの主体となる。平和ワーカーは、市民芸術家である。こういったわれわれの社会におけるわれわれ自身の変容の過程において、「もの語り」が作用する余地があることを認識したいのである。市民芸術家であるところの平和ワーカーは、自由な発想で考え、今まさに起ころうとしている暴力を批判し、創造的なオルタナティブを提案し、実際に行動する。語り手と聴き手が、コンフリクトの所在を深く理解し、一緒にコミュニティを形成し、行動していく。「もの語り」を通じた芸術アプローチの一つの方途が、こうして、平和ワークにおける関係性創りのもう一つの新しいチャンネルを引き出していく。

5. おわりに

修復的対話 (restorative dialogue) を推進する Mark S. Umbreit らは、“There’s something powerful about restorative justice in circle dialogue, since there’s more listening than talking. (話すことより聴くことがより多くあるがゆえ、サークル対話における修復的正義には、何か力強いものがある)” という (Umbreit, Blevins and Lewis, 2015: 50)¹⁷。サークルプロセスにおいては、他者が存在する数の分だけ聴く作業があるのだから、語るより聴く作業が多いというのは、その通りである。数多くの他者がたくさん語る。そして、それをたくさん聞く、傾聴するということには、何か力強いものがあるというわけだ。

日本平和学会平和教育プロジェクト委員会では、現在、ファシリテーションとは何かを深く探究し、「やりとり」力という概念を軸に、実践を通じて理論を開発しようとしているところである¹⁸。「やる」力とは、話す・アウトプットする・語る力である。「とる」力とは、聞く・インプットする・聴く力を指す。平和的対話とは何かと言われたとき、「ゆっくりと耳を傾けて、心を寄せて聞き取ること」と一義的には答えてしまいがちである。しかし、それだけでは、「とる」力のみ注目して終わってしまう。「やる」力とは、ゆっくり考え、心を込め、感情も十分に表現しながら語ることである。この両方が成立し、交互に循環することで、平和的な関係性の構築が可能となり、対話のプロセスが徐々に実現する。

トレーニングの要素の強いワークショップ等の場においては、一見、逆説的なようだが、ファシリテーションの手法の一つとして、参加者・当事者を、強くプッシュしてエッジを感じさせ、「ゆっくり」考える余地のない中とてにかく反応することをトレーニングの一部とすることがある。「追いつめられて」思わず、すなわち深く考えず、脊髄反射的に応答すると、自分自身がよりよく見えてくることがある。自分自身の中に潜在している何かが顔を出す。すなわち、下意識が可視化-さらに、可聴化-されるのである。

すなわち、ファシリテーションの数ある意義のうちの重要な一つのポイントは、「見えないものを視る」、「聞こえないものを聴く」そして、「見えないものは聴き、聞こえないもの

は視る」ために、参加者の手伝いをするということである。こうして、対話とは、チャンネルの違うセンス・感覚を交信させて、やりとりすることを意味することになる。

本稿は、ファシリテーション・メディエーションとは何かを検証し、平和創造のワークを容易 (facile) にするアプローチの一つとしての芸術のあり方を模索するものである。芸術アプローチを用いることとは、コミュニケーションの、また関係性創りの「新しいチャンネルを引き出す」ことである。今回は、「もの語り」という芸術ジャンルに焦点を当てることを試みた。

ただし、今回は、ファシリテーション・メディエーション、もの語り・もの語ることや、サークルプロセスそのものについての解説－歴史的・学術的・政治的分析－を意図してはいない。これらの鍵概念が、平和ワークの分野において、如何に有機的に結びつき、平和創造・平和構築・紛争転換といった平和ワークとして、具体的に機能する可能性があるかを問うものである。語り手は、平和ワークの新しい担い手としての市民芸術家として、自由に発言・行動する存在となる。彼らは、提供される時空間（場）において、想像力を解放し、紛争を深く理解し、自身と、そして聴き手との対話を始める。そうした対話において、新しい平和価値の創造が行われる。そうしたプロセスを徐々に時間をかけて経ることで、平和ワークの主体としての市民と、語りの主体としての語り手・芸術家が、一人の人間の中で一体化した人間類型となる。自由で、社会の様々な規範・制約・常識に囚われない芸術家であるその市民は、平和ワークの主体、すなわち平和ワーカーとなる。さらに、そうした人々が共に存在するコミュニティは、それ自体が平和創造・平和構築・紛争転換の場へと変容していくのである。

注

- 1 日本語訳は筆者による。
- 2 本図は、ガルトウングの図を、筆者が応用したものである。
- 3 「レッドゾーン」や「ブルーゾーン」とは筆者が名付けたものである。
- 4 トランセンド理論に基づくコンフリクト解決方法については、例えば次を参照されたい。奥本京子「安全保障アプローチから紛争転換を軸とした平和アプローチへの移行」『国際共生と広義の安全保障』（国際共生研究所叢書4）黒澤満編，東信堂，2017. pp.49-75. または、国際トランセンド <http://www.transcend.org>, トランセンド研究会（トランセンド日本） <http://www.transcendjapan.net>.
- 5 詳細については、奥本京子「安全保障アプローチから紛争転換を軸とした平和アプローチへの移行」を参照のこと。
- 6 日本語訳は筆者による。この“Acting Together on the World Stage”というプロジェクトは、書籍2巻と映像DVD1枚という目に見える成果を出した。O'Neilによるパフォーマンスは映像DVDに収録されたものである。詳細は次を参照のこと。 <http://www.brandeis.edu/ethics/peacebuildingarts/actingtogether/> または <http://actingtogether.org/>
- 7 日本語訳は筆者による。
- 8 日本語訳は筆者による。
- 9 日本語訳は筆者による。

- 10 日本語訳は筆者による。
- 11 詳細については、東北アジア地域平和構築インスティテュート、<http://narpi.net> を参照のこと。
- 12 ナルピにおける共同ファシリテーターは、片野淳彦氏、Meri Joyce 氏、Francis Daehoon Lee 氏、Babu Ayindo 氏、Ho Chi Kwan 氏、Oyunsuren Damdinsuren 氏らであった。
- 13 サモアン・サークルについては、例えば、click4it, UNITAR learning and training wiki, "Samoan Circle," http://www.click4it.org/index.php/Samoan_Circle などを参照のこと。
- 14 ホーポノポノの概念については、E. Victoria Shook, *Ho'ponopono* を参照のこと。ハワイ文化における何世紀もの間の関係性における豊かな知識体系についての研究である。ホーポノポノとは、具体的な和解の方法の一つであり、紛争を解決するためのシステムである。ハワイ外部からの宗教的・文化的・政治的侵略により1900年代半ばには廃れつつあったこの手法は、1960～70年代あたりから、ハワイアン・ルネッサンスの波の中で、Mary Kawena Pukui らによって再興され、欧米的な要素も盛り込まれるようになった。近年、この伝統的な家族の概念と実践は、多文化社会であるハワイの社会福祉分野において導入されてきた。また、Johan Galtung は、これに示唆を受け、社会科学である平和紛争学に応用した。詳細については、奥本京子『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性』を参照のこと。
- 15 詳細については、奥本京子『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性』を参照のこと。
- 16 詳細については、Howard Zinn, *Artists in Times of War*, New York: Seven Stories Press, 2003. を参照のこと。
- 17 日本語訳は筆者による。
- 18 詳細については、日本平和学会ホームページに掲載されている平和教育プロジェクト委員会によるページ、<https://www.psjaj.org/> 平和教育プロジェクト / を参照のこと。筆者は2014年から当委員会の委員（2014～2015年の第21期には委員長）である。

引用文献

- Cohen, Cynthia E. and Allison Lund (Editors). (2011) *Acting Together on the World Stage: Performance and the Creative Transformation of Conflict* [DVD]. Cambridge, MA.
- ガルトゥング, ヨハン (2000) 『平和的手段による紛争の転換【超越法】』伊藤武彦編, 奥本京子訳, 東京, 平和文化.
- ガルトゥング, ヨハン (2005) 「ホーポノポノ『アジア・太平洋の平和』(Pax Pacifica)」, 『トランセンド研究：平和的手段による紛争の転換』奥本京子, 藤田明史, 中野克彦訳, 3.1, 3-13.
- 平田オリザ (2001) 『対話のレッスン』東京, 小学館.
- 日本平和学会, 平和教育プロジェクト, 2018年9月25日, <https://www.psjaj.org/>平和教育プロジェクト/
- 奥本京子 (2012) 『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性：ガルトゥングによる朗読劇 Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica からの考察』京都, 法律文化社.
- Pranis, Kay. (2005) *The Little Book of Circle Processes: A New/Old Approach to Peacebuilding*, Intercourse: Good Books.
- Schirch, Lisa and David Camp. (2007) *The Little Book of Dialogue for Difficult Subjects: A Practical, Hands-on Guide*, Intercourse: Good Books.
- Shook, E. Victoria. (1985) *Ho'ponopono: Contemporary Uses of a Hawaiian Problem-Solving Process*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

東北アジア地域平和構築インスティテュート, 2018年9月25日, <http://narpi.net>

Umbreit, Mark S., Jennifer Blevins, Ted Lewis. (2015) *The Energy of Forgiveness: Lessons from Those in Restorative Dialogue*, Eugene: Cascade Books.

Zehr, Howard. (2002) *The Little Book of Restorative Justice*, Intercourse: Good Books.

Zinn, Howard. (2003) *Artists in Times of War*, New York: Seven Stories Press.

